

渡口・和仁屋の大部分の部落民が、島袋と渡口の中間の塚にいて早目に捕虜になり、砲撃、銃弾、榴散弾、黄燐弾、迫撃砲などのための惨禍が少なかったのは、この上ない幸せであった。

しかし米軍は、捕虜になった住民を北部に移し、衣食住の欲で、多くの栄養失調の死者が出たのは、他の地方の人たちと違いはない。ことに、渡口・和仁屋・熱田、三か部落は、北中城村でもっとも遅れて、自己の部落に帰ることが許され、その点で長時日不自由と窮苦を負わされたようである。

出席者のなかった熱田の記録もこのまま、全然失われては残念であるので、多少でも、載録したいものである。

北中城村を併せた旧中城村は、沖繩の戦争前には総人口一万八千であったが、終戦後委しく調査したら一万二千が生き残り、六千人が犠牲になっているが、これは、中城村以南の各市町村に較べて、いい方であるらしいと比嘉永俊さんは話された。

比嘉 永俊（三十九歳） 村農業会専務理事

わたしは当時、昭和十九年は中城村農業会の専務理事をしておりました。それで昭和十九年の夏頃でございました。駐留部隊が、村に、二箇所に入って来たわけでありまして。北部中城と南部中城に。それで北部中城は賀谷部隊、南部中城は山本部隊、つまり石部隊の下の部隊、大隊でございせんか。そういうふうになっていましたので、両方の部隊から供出の頼みがありまして、両方の部隊にしょっちゅう行って、出入りした次第でございまして。

飛行場建設、製糖と荷馬車の関係ですが、空襲が彼岸の翌日、三月二十二日（二十三日）から始まったので、製糖もやっていたのをほったらかして、ほとんど逃げています。ここには、熱田共同製糖工場など二つの製糖工場がございまして、四、五百挺くらいここに置き去りにして逃げたんじゃないかと思えます。一月に製糖開始しましてですね、二か月ぐらい製糖しているわけなんです。その間はこちらと荷馬車の方はですね、協力は少くしまして、村でも事情をいって了解受けまして、そういうふうにやった覚えがあります。

当時砂糖は、百二十斤入り一挺で十三円ぐらいではなかったでしょう。米は、全員が同じ量を受けて、各部落の売店の配給所を通じて売っていました。

荷馬車の賃銀は、人間も合して、最初は一円八十銭からですよ。最後には二円五、六十銭から三円ぐらいまでですね、馬車にも大小がございせんからね。

註、出席者の発言「しかしこの荷馬車の徴用に当てられた場合に、自分の子供をそのまま置いて行きおったね、門（家号）のおばあんかは、女がね、馬を持ってよ、行きおったですよ、小さい子供を家に置いてよ。もう仕方がない、おやじは兵隊に召集されてですね、も仕方がない、おばあさんですがね、徴用というところで、割り当てが来ましたらですね、どんなことがあっても行かねばならない」。

これは、国民としての協力という意味で、うちは非常に苦しい生計をしているがらですね、沢山の子供を持っている人でも、主人は防衛隊が兵隊に召集されて、子供等は女の手一つで預かっていて

それあの時は、一億国民が全部戦争へ協力と、自分は食べなくても供出に協力しようではないかということで、各部落ともに督促しまして、それで芋、あるいは野菜、それから冬瓜、とか南瓜をですね、各部落の区長を中心にして、全部供出をさせまして、両方の部隊、喜舎場にある部隊、津覇つはの小学校にある部隊とに村民が総協力やりまして、戦争遂行に支障のないようにとしたわけでありました。

それにわたしはまた、中城村の荷馬車組合長をしておりまして、全部の台数が、二百七十台ございまして、これは、中飛行場（現嘉手納飛行場）といいますが、屋良に、そこに一週間ないし十日、三交代でもいいから、自分の仕事にも支障がないように、三つに割って、飛行場建設に、各部落に班長制で、しょっちゅう絶やさないで行くように、交代制で行ったわけでありまして。それで、供出や、荷馬車とその人夫賃などについては、組合を通じて、主計少尉が金払いにはいつも見えていたわけでありまして。

当時の物価は、豚肉が一斤、米が一升、男の一日の人夫賃、そういったのが、五十銭であつたと思えます。

あの当時は、統制でございまして、砂糖も農業組合で一括して取り引きしてまして、値段については、不満をいう人を見当らなかつたと思えます。店から配給される品物もすべて公定でありました。が、何しろ物がなかったので、石油がないし、酒もないし、大体配給だけでもいいんですが、團（正規の配給ルートでない買売）は、べら棒にたかかったでしょうが、公定相場の二倍、あるいは三倍ぐらいだったのか、憶えておりません。

も、それにはやっぱり協力せんといかんというような立場にみんながあつたわけでありまして。

註、供出物の種類の質問で、芋が主であらゆる種類の農作物が供出されたが、冬瓜は、他府県出身兵士は好まなかつたこと、芋かすらの供出であつたが、それは馬の飼料ではなかつたらうか。それから芋が主だったのは多分、飛行場建設の徴用された人びとの食料だったのでないかということ、飛行場建設に読谷（北飛行場）、屋良（中飛行場）、西原など各所へ徴用された出席者へ、談者の比嘉さんが訊いたら、読谷飛行場建設は、芋ばかりで、虫食いが多く、ほとんど空腹状態で重労働をさせられ、屋良の場合は、芋に麦を入れた芋粥だったとの話が出た。また、読谷飛行場建設場で、多分朝鮮の人でなかつたかと思うが、服がよすぎるといふことで、こんな華やかな服着て戦争ができるかといふ、兵隊に崖から突き落されて危く死ぬということがあつた、という挿話も出た。

三月の二十六日だつたと思えますが、午後の三時間ぐらいで五百戸ぐらいの家が燃えましたよ。その時わたしは消火作業に来ました。が、どうしても手がつけられない。熱田と渡口といっしょに燃えました。焼夷弾でね、機銃掃射しながらどんどん焼夷弾を落したんですがね、どうしても手がつけられん。そして飛行機が機銃掃射する時は、暗渠にもぐって、それから消火作業をしようとするんだが、それがどうしてもできなくて、三時間ぐらいで熱田と渡口は、きれいに燃えてしまいましたよ。

島袋に行く途中に内原というところがございまして、その山に

みな自分の墓、あるいは塚をつくりましてね、自分の御先祖の墓

あけて、そこで、二十三日から塚住いがはじまりますが、空襲がはじまりましたので、それで、ほとんどあっち(墓地の周辺)が、晩になつたら街みたいにぎやかになるんです、あの山の中が。渡口と島袋の合い中の大きな奥深い山でございますが、そこは約七か部落の住民が塚生活しているわけです。久場・熱田・和仁屋・渡口・与儀(美里村)・比屋根(同)・島袋ですね、それに比嘉、七、八か部落です。まあ大抵、それだけが中心になって、そこで塚生活しているわけです。どうしてもうちに寄りつかれないんです。

この内原の山は土質がですね、沖繩でいうニービ墓といいますが、(ニービは、色は黒褐色。土のように見えるが石のように堅い、第三紀砂岩) 艦砲ぐらいいは動かなかったんです。何百キロかわかりませんが、爆弾では二、三つぶれたのがあります。それで二戸一家全滅がこの部落にございます。それはあさって頃は上陸という三月の二十七、八日でしたか、爆弾の直撃に当りましてね、そこに入っていた十名そこらのもはそのままです。大きな爆弾がどこどこに落ちおるんです。

墓はニービに掘り込んであるので、塚を造らない方は墓をあけてそこに入っておったんです。うちの部落の墓はほとんど横穴になっているが、艦砲はめり込んで、ひびも入りませんでした。御先祖といっしょに入っているわけです。

それでこの辺の人は、こんなに助かっています。それから元の役場ですね、今の中城城址、あっちが役場だったんです。城址の下にほら穴が掘ってあって、そこで役場の事務も農業

弾がどんどん来ますしね、当てるはすれの弾がどんどん来ます、これは艦砲ですすね、酋長(西原村)は幸地の下になっていますから。

これではどうもおれないということで、二十七名は各家族ごとに別れて、わたしは家族十二名をつれて、夜通しで家族全部を歩かしてですね、東風平村の志多伯というところへ行きました。志多伯で塚がなくて困っていると、軍の塚が入れるよということ、十二名の家族がお世話になったわけです。それが四月十二、三日だったと思います。

この志多伯に着いて三日目ぐらいから、猛烈な艦砲射撃がありましたして、飛行機からも機銃射撃がありました、ただその一日のうちに志多伯はなくなりました。今まで大きなうちがございましたが、何にもなくなってしまうって、行って見たら。ここでも家族には(怪我など)何もなかったんです。

それで具志頭村の後原に行つて見ようではないかということ、それで四月の二十日頃になって、また二十名ぐらい合流して、ですね、行ったわけです。

そこは一時はいいところでございましてね、そこに約四十日間ぐらいいりました。塚は軍隊が捨てて行ったのと、自分でも掘ったが、後原の人は、親戚だからといって、掘ってくれたんです。

約四十日間ぐらいいりました、弾がちよいちよい来るんです。あっちの塚は、この辺の塚とは土質がまるっきり違いました、沖繩でいいすクチャの骨ですね、白土ですから。それで非常に脆いんです。そういう土質に掘ってあるんです。それで軍は材木を

会の事務もやっていたんです。

それで四月一日、午前からどんどん艦砲をやりながら大陸を始めます。それではどうなるのか、と思うんですが、三月二十三日以後は、慶良間(渡嘉敷村、座間味村、那覇の西方一八キロから二十二キロの海上に散点する小島群)から残波岬までですね、暴風の後の池に木の葉が浮んでいるように船があるんですね。それで四月二日になったら、すでに中城に戦車砲を向けて戦車が来るのが城址からは坐っていて見えるんです。それではうちの部落の連中も大変だといって、村長が区長を通じて、北部には駄目だから、南部へ逃げようではないかとやったら、それを希望しないんです。それでわたしなどは、弟の家族、弟の連中は防衛召集に行つて、そこにはおりませんので、弟の妻子、それに自分の家族と、合計十二名をつれて、四月の二日の夜の八時頃(二十時頃)塚を出まして、自分の部落を通りまして、老年のおふくろを連れていきますので、夜の十二時頃に、西原村の役所のあるところ、酋長に辿りつきました。当時の村長が、古波津セイコウといてですね、わたしとは中部で同級生でありましたので、塚をさがしてくれ、十二名の大家族を連れていって頼んだんです。ところがあつちで合流したのが、熱田のお医者さんの家族、うちの部落のいとこの連中合して結局二十七名の人間が墓一つをあてがわれましてですね、墓をあけて入ったわけです。その墓のあるところは、チキン城というところ、そこで約一週間から八日ぐらいいました。御承知の通り、もう四月の十日頃になっていますから、棚原(西原村)の線、幸地(同)の線が非常に激戦地でありますあの時から。それで流れ

伐採して、いくらか入口に柵をはめてあるんですが、自分等の塚よりそこはいいじゃないかとそこへ移ったわけです。

わたくしのおふくろは満六十七歳で、わたくしが三十九歳でした。おふくろは、わたしは寝ているところに、かならずそこに寝たというんです。塚生活ですから、ほとんどが坐っているが、寝ているんですね、正午頃の真昼でしたが、あなたが、ここがいいのなら、そうしなさいと席をかわったんです。そうすると、かわってからほんのちよっとの間です。五百斤ぐらいいのあのクチャの固りがですね、それがおふくろの上に落ちて、即死です。わたしの妻の妹もいっしょにやられました、妹の方は、かたわらにいた連中が石を取り除いて助かりました。即死は、わたしのおふくろひとりでした。妻の妹は、あとですつと病院通いをしましたが、癒りませんでした。

そこもそれからは激戦地の様相になりました、機銃掃射は毎日あるし、艦砲なんかも来るし、軍が、できればもっと南に移動しないかといっていたが、六月一日に移動命令が来たんです。それから家族だけ十二名になるんです。それで六月二日から三日がかりで、真壁村の(字)真壁に着きました。

その第一日目は、具志頭村の字具志頭の裏の方、新城(字)の前に病院塚がありました、そこは五百人ぐらいの人が入りますよ。そこで弟とあいまして、どこで死ぬかわからんから、子供等の顔を見て置きなさいといつて対面させました、今三十一歳になっている青年を頭に、子供等を全部あわしてやりました。偶然に防衛隊からそこに来ていましたので、これが妻子の見おさめかもしれな

いといった気持ちでありましたでしよう。

翌日は弟と別れまして、いつも南へ南へと行くことで、同じ具志頭の破名城部落の人の家の納屋で一晩過ごして、三日目に、真壁部落に落ちたのです。

真壁に着きましても壕というのはいないんです。全部裸といった気持でしょう。人の家に寝ることができなければどこかの石垣のそばですね、そういうふうにして、そこで約一週間、十二名の人間のあれやこれや、食糧あさりをして、生活してですね、掘立て小屋にいたわけです。

そうしましたら、日本軍の班長みたような人が一人来てですね、そこは兵隊が入るから出るというんです。その時、子供が泣きまじった。わたしの家族十二名のうちには、二歳になるのと三歳になるのと、小さい子供が二人いたんです。それで泣いたもんですから、それを連れて早く出ないとやるぞ、敵はそこまで来ているのに、子供を泣かして、それでいいのかとえらい剣幕で怒鳴られました。それでわたしは、われわれはどこで死んでもいいし、兵隊さんは何んとか生きていて貰わなければなりませんから、われわれが出て行きますよと、十二名の家族を連れてそこから立ち去りました。向かって行ったところは、真壁村に糸洲という小さい部落がございいます。ちょうどその糸洲の部落にっこうという時に後を振り返って見ると、わたしたちが住んでいたところが、凄惨な火の焔を立てて燃えているんです。それで、あそこに行ったら、この十二名の家族が全滅していただろう。兵隊さんに追い出されてよかったと話していました、その時わたしは、人間の生と死には、何秒というちよ

石垣が逃ぎてくれますし、直撃を受けたら、全滅だが、破片ですと、助かります。わたしたち家族は、そこにいたので、助かりました。大きな家を占領していたものは、ほとんど直撃でやられました。しかし、あの時は直撃でひと思いに死ぬのは幸いだ、といった考えをみんなが持っていましたので、直撃を恐がるという気持はありませんでした。

わたしは食糧あさりの時に、艦砲に二度やられました、破片をよけて助かりました。

アメリカは五時から後は艦砲も、いろいろの銃撃もやりませんが、その時に炊事をやっていたが、糸洲では、持っていた食糧は全部なくなって、畑に夜行って、芋や野菜類、何でも食べられるものはあさって来ました。そうして、六月十二、三日から、六月の十八日まで、昼は、艦砲や爆弾をはじめ、いろいろの砲撃、銃撃が、雨が降るように隙間なくくらいに熾烈でしたが、約一週間そこで過しました。

そうすると十八日の夜、友軍が銃剣を持って、軍は大渡・米須から半里(二キロ)ほど先の摩文仁の丘の方に集結するから、民間の人たちもあそこへ今夜の中に集って、軍に協力するようにといて、避難民の残っている家を廻っているんです。アメリカはすぐ上の丘まで来ているんです。友軍は、もし諾かない避難民は、刺し殺すといった凄惨な気持ちを示していますので、わたしは、これだけの家族、ことに乳呑み児や子供たちだから、明日未明に出発しますから、今晩は勘弁して下さいと願って、やっとその晩行くことを許して貰いました。

一どの時間、ちよつとこのことで、別れるもんだなど、考えさせられました。あつちは、きつと、艦砲が爆弾かに、追い出した人が直撃に当たって、全滅したのでないかと思うんです。

それで糸洲の部落では、製糖小屋に行つたんですが、あの当時は旧式の製糖の竈で、鍋が四つ並んであるんですね、そうしたらそこに兵隊が二人死んでいるんです。負傷も何もしてないから、多分爆風でやられたのでしょう。それでもわたしたちは、そこへ入らなければなりませんから、子供等をはじめに竈の奥へ入れてみんな入っていました。そこに来たばかりの時に、わたしの妻の二十になる妹は、艦砲の破片にやられて即死しました。それで十二名だった家族は十名になっていました。

糸洲部落では避難民が大変な数になっていて、家はほとんど残ってしまいましたので、早く来た人たちは、それらの家を占領してしまいました。ところが、そういう家はほとんど直撃を受けるんです。大きな家ですと、爆弾の直撃で六、七十人の避難民が、一度にやられました。

糸洲部落の熾烈さは、何ともいえないものでした。艦砲が来る、爆弾が落ちる、迫撃砲は打ち込まれる、機銃掃射はするし、黄燐弾は蒞かれる、昼中は一刻の絶え間もないんです。

それでわたしたちは、石垣の隅へ行った方がいいではないかというので、人の屋敷の石垣の隅にすることにしました。前の方には石を積んで、石垣を背にして並んで坐っていたわけです。それなら、艦砲の破片でやられる心配はないと思つたんですね。艦砲の破片は、ある角度をもって、上って飛びますので、後から来るものは

ところが、翌十九日の朝の八時に捕虜になりました。豊見城村の伊良波へ連れて行かれて、そこであれやこれや訊問を受けてゴザへ送られました。妻子とは別べつで、わたしは一人だけで、妻子やほかの家族は島袋に移されて、あとでゴザへ来ていっしょになりました。

具志頭村字具志頭の壕で、偶然に遭った防衛召集されていた弟の妻子も、一時ゴザでいっしょでありましたが、実家の父母が福山にいたので、あつちへ行きましようといいますので、それならそうしなさいと、父母のいるところへ行きました。乳呑み児と四つになつていた子供と、二人男でありましたが、捕虜になる前から栄養失調になっていました。それで、二人の子供は捕虜になって二か月くらい経た時に死んでしまったんです。自分の家、部落を出た時は、十二名でありましたが、四名は戦争で死んだわけでございます。

戦争中食糧は、大して困りませんでした。糸洲にいた時は、持っていたものを食いつくして、人の家に行つて、さがして、澱粉や味噌などもありましたし、また畑の芋や野菜などもあさりしました。

村を出る時まで、わたしは農業組合の専務をしていますから、営団の倉庫にある米を捨てて行くのもつたいない。南へ行くものは、倉庫あけて、持てるだけ持ちなさいといつて、郵便局長の安里永太郎さんや、この前亡くなったお医者さんの大城さん(大田?)なんか、みんな持たして上げたんです。倉庫には、食糧営団の米が相当に積んでありました。ところがわたしは持つわけにいきません。家族は持てるだけ持たしました。

わたしは、倉庫には、組合の砂糖代や何やで、預金の書類です

ね、当時にして六十万円くらいですか、それに現金も二万円くらいあったんです。これだけのものを無くしては、生きていても駄目だからと思ひまして、それをカシガー（麻袋）に入れましてですね、人がこれなにかと訊かれた時には、何でも無い、襦袢を詰めてあると言ひがれていました。

それで最後に、家族ともいっしょに話し合ひまして、自分の墓を立てましてね、鷺に農業組合の預金帳や納簿、現金も入れて、埋めて鉄砲を被せました。筆紙墨を焼け残りの家でさがして来て、幸い手頃の板もさがされたので、自分がそこに埋められているようにしたんです。それは、日本は絶対に勝つから、自分が家族もろともどこかで死んでも、本土へ疎開している子供が帰って来て、父の骨をさがしてそれを掘り出し、村へ返してやれるという考えからでありました。

それで戦争が終つて百日ばかり経つてからでありましたが、アメリカをちよつとおだてて、妹の骨を掘りに妹を埋めてあるところへ連れて行つてくれ、と頼んで、連れて行つて貰ひました。組合の預金通帳類は、妻の妹を埋めてあるところに、並んで埋めてありましたが、わたしは、もう自分は生きているのだから、妻の妹の骨はいつでも取りに来ることができると思つて、自分の墓から掘り出しました。そうしたら、アメリカは、妹の骨ではないではないかといつていました。そうして、預金通帳や帳簿や元金も、村役所へ返しましたよ。

それから後原にいた時ですがね、その時は食糧に全然困りませんでした。持っているのと、後原には親戚がいますので、その方から年寄りが多くございましてね、栄養失調が一番多かったと憶えています。それで病院の裏の山に、長さが六尺ぐらい、幅が四尺ぐらいの穴に入れるわけです。担架で持つて行つて入るだけ入れます。どうせ自分等も死ぬもんだあの時は思つているもんですから、死んでいる人を羨ましく思うぐらいでした。捕虜になる時も、村の近くに行つて、殺されようねと話し合つたんですし、どうせ此奴等に殺されるんだから、と思つていたからでした。

そうして、そういつた死んだ人たちを可哀想といつた気持はありませんでしたね。この人たちもわれわれといっしょに相当苦勞しているだろうがということしか思ひませんでした。男と女は別べつであつたと思ひます。わたしは女の人を埋葬した記憶ですがね、死んでいる人を運んで埋葬するのは恐くてですね、なるべくは水汲みなどして、それをのがれたいと思つたりしました。死んだ人で穴がいつぱいになったら、また新しい穴に入れました。どこの誰かわかりませんから、また死ぬ人が多いので、そうするよりほかに仕方がなかつたんですね。

あの時の墓地は、今は市営住宅のアパートが建つているんですがありませんか、遺骨はどこかに移したんですしよな。

死んでいる人が羨ましい、可哀想に思ひなかつたというのは、真壁や糸洲ですね、あの激烈な中にさらされていたのから、まだ二、三日しか経つていなかつたんです。それで前にもいひましたが、死体埋葬をしていても、自分も苦しい思ひをしたあとで死ぬものと思つていたんです。糸洲で妻の妹を、穴を掘つて埋める時ですね、お前は幸福だぞ穴に入ることが出来て、われわれは長く生

もいろいろ面倒を見て貰ひました。今さっきこっちに来ていた人です。今日、ここへ来ていますよ。今八十歳になりますが、家号は翁長小といつて、一門の人です。翁長牛というんですが、馬や牛を屠つて、肉を持つて弾の降る中を歩き廻つて売つていましたよ。あなたは昼日中、そんな弾の中を歩いたら大変だがといつたら、わたしはお前、飛行機が飛んでいるのが見えないから何でも無いよ、といつて、どんなに弾が来ても一向お構ひなしに歩き廻つていたのに、全然弾や破片に当たらないで生きていますよ。この人は、わたしたちのために、何でもあちこちからさがしだして来てくれるんですよ。それでわたしたちは、後原にいた間は、食糧にも、ちつとも困りませんでした。この人はもともと後原の人ですが、今は港川の隣、長毛部落にいます（具志頭村長毛の座談会に出席された翁長牛さん七十九歳の方である、話が全部一致している）。

この人といっしょに、松の下（屋号）のお爺さんという人が、牛馬をつぶして売り歩いたそうであります、札（束）を大きな袋いつぱい持つていて、弾に当つて即死した、ということを話してました。

わたしは、伊良波からコザに連れられて来ましたら、翌日から病院へ行つていこうと行きました。

コザの病院は、前線にもつとも近いんですね。つまり捕虜になる人も、捕虜にならない前に弾に当つた連中もみんなそこに引つ張つて来るわけです、その野戦病院に。そこではほとんど死にますよ。栄養失調もおれば、怪我を受けて重態になつた連中もおりました。

そこから治療を受けて癒つて行つた連中もいましたが、しかし死体は

きて、穴を掘つてくれる人もなく、野ざらしになる、大変だ、といひながら埋葬したんです。事実、歩いていける道はたにそのままほつたらかされて死んだ人がずいぶん多くありました。あまり弾が激しいので、夫婦、親子、兄弟の仲でも、埋めることができなかつたのだと思ひます。

それから、糸洲の砂糖小屋に行く時ですがね、砂糖小屋の近くに池があるんです。そこに子供を負つた女が死んでうつ伏せに顔を水につつ込んで、浮んでいるんですね。背中の子供は誕生ぐらいで、女の子です。泣きはしないが手を動かしたり、頭を動かして、生きています。それを見てわたしの妻が、そこにも人が死んでいるね、といふと、

「生きていますよ、わたしは生きていますが、黄燐弾を浴びせられて、目が見えなくなつていますので、この子供を貴方がたの子供にして下さいませんか。わたしは首里のものです、そこから友軍が通つていきますなら、鉄砲で撃つて、早く死なすように頼んで下さいませんか」といいますので、わたしが、「そんなことは出来ない、早く出て生きるようにしなさい」といふたら、「わたしは体も黄燐弾で焼かれて、痛くてどうにもならないので、水に浸かっているんです。物も見えませぬうえに、ほとんど全身がただれています、早く死にたいのです」。

こんなにいふていましたが、あつちにもこつちにも弾が降つて、妻の妹が即死するような激しい中でございすから、看護して上げる余裕がないんです。子供等も破片にさらして追ひ詰められて歩くんですからね。それで見捨てるほかはございせんし

た。子供は栄養失調で泣かなくなっていたのかも知りません。多分そのまま母子その池の中で死んで沈んだんだと思います。

わたしは、そのように、自分も考えの上では、つまりですね、精神は死にとりつかれていたから、死んだ人への哀悼の気持ちがなくなっていたと思います。

戦争当時を思い出しますとですね、わたしは、自分の男の子一人、二人の弟の子供も一人づつ、本土へ疎開させておきました。この部落から学童疎開させたのは、わたしたちの子供三人だけでございました。それで、自分たちは玉砕するが、日本はかならず勝つかから、本土に残してある種子は、沖繩へ帰って来て、立派に家を継ぎ親たちの骨も拾ってくれると信じていました。当時の戦争指導者はそういうふうな、指導していたんですね。自分等は玉砕するんだと、決めていたわけでございます。

わたしは三日間死体埋葬人夫をしましたら、お前は配給の経験があるそうだから、ということまで配給係りに廻わされました。それでわたしは三日間の死体埋葬人夫をしただけで、戦前の配給の仕事は、戦後もずっとやることになりました、沖繩食糧会社も設立して、昨年その職を退きました。

具志頭の病院で偶然に遭った三番目の弟は、防衛隊で、怪我した兵隊を運んで来たり、病院で死んだものを選び出して埋葬したりしていたとのごさいます。戦死するだろうと思った弟の方は生き残って、子供等二人が栄養失調で死んだ。弟は屋嘉の收容所からハワイへ連れられて行って、帰って来ました。

すぐ下の弟はチモールから、引揚げ者といっしょに復員して来ましたが、わたしは、わたしは、国頭の方へ疎開しておいたそうですがね、向かうで栄養失調になってしまっていて、自分の女の子や姪やら甥やら四名の子供を亡くしてしまいました。栄養失調であったそうです。それでわたしが帰って来た時には、家内も残った二人の子供もマラリアで、へとへとになってぶらぶらしておったんですよ。あと四、五日で死ぬという立場になってしまっているのを、宮城盛輝さんに助けて貰ったそうです。あの時は、移動は許されてなかったそうです。それを宮城さんがコザの総務課長していられて、軍に特別に許可を貰ってですね、助けられたそうです。うちの家内は、宮城さんとまいたいところですかね、今のコザ市で、安慶田の前というところですね、同じ屋敷にいたわけですよ。

妻たちのいたのは、久志村の瀬瀨せのせであつたそうです。そこで栄養失調になってですよ、そこで自分の妹の子が一名、また下の妹の子が二名ですね、うちの娘がひとり。終戦後遺骨拾いに行きましたがね、砂に浅く埋めてですね、珍らしいですよ、何か気候の関係かもしりませんが、肉もひっついてたですよ、乾し魚のようにしてですよ、肉も落ちていなくなつたですよ。どういふ関係かなと、吃驚くわくきょうしました。兄弟同志の二、三歳の子供が四名死んでしまったです。わたしが帰った時は、妻子は、ちょうどマラリアの最中で、やっと歩けるという状態でした。

この安慶田の前はですね、飲み水が欠乏してですね、午前二

した。

現在は二人の弟たちも、子供もできて、いい家庭をつくって

比嘉 龜 盛 (三十七歳) 現地召集兵

わたしは八重山の守備に行っていました。あつちでも空爆や機銃射撃がありました。

わたしは、ずっと対空監視ですよ、対空監視は拝所のところにあつたんです。福木の木がありますね、それで福木の頂上にも上つて、中隊長に報告をやっておつたですよ。そうしたらある時、わたしの上空を、飛行機が五回旋回するんですよ。今度は、これは免れない、いっぺんにばらっとやられてしまうと思つたんですが、ところがそういう間際になると、あまり恐い気はしません。それですぐ隣りに落ちたんだが、福木の葉が、さあっと一度に落ちおつたんですよ。

その前にまた、中隊長は高石という人でしたが、四国の方で。ばんばん爆撃を受けて、疵を受けたんですよ、その丘でね。それでわたしは、中隊長殿、この毛布をといったら、投げろと手でやるんです。わたしは、いつも毛布を持っていますからね、ずいぶん脅えおのいていましたがね、わたしは恐いという気持ちはほとんどありませんでした。

兵隊から帰ると、二日間は屋嘉にいましたが、この比嘉さんや、今村議会議長の宮城盛輝さんがたが安慶田の前といいますが、そ

時、三時に起きてですね、順番を待って、水を汲んで、妹たちに、水の配給もやっていたんです。

それからわたしの母のことですが、母は足を負傷して、美里(村)の古謝というところに收容されたらしいんですよ。それで足の疵の状況が悪いので、病院へ行かねばならないということだつたそうです。ところがその時分は、病院へつれて行く付き添いの人はなかつたそうです。それで母ひとり病院へ行きなさいということを出かけて行ったそうです。その後は全然わからなくなつてしまつたんです。今比嘉さんの死体埋葬人夫のお話をきいて、母もその死んだ人の中にいたのではないかと思うんです。安慶田の前にいた時も、妻もあちこちさがしたそうですが見当らなかつたし、わたしも捜しましたが、何の手がかりもありませんでした。せめて遺骨でも、どこかに見つかりはしないかと、ずっと思つて来たんですが、今日になつてもやはり駄目です。

それから二人の妹たちの夫は、ともに防衛隊に取られましたが、とうとう二人の骨も帰って来ませんでした。これもどこで死んだかわかりません、遺骨もやはり手がかりがなく、そのままなんです。

それでわたしが兵隊から帰って、男はわたし一人しか残つてなかつたんです。今うちの長男と、下の妹の息子とは同じ年で、二人とも三十三歳になっていますが、あの時は九歳でありました。当時余所の区域には出られませんでした。わたしは九歳になつて二人をつれて、さつき塚の話がありましたね、ニービの。あの山の頂上は畑でありましたので、芋を取りに行つたですよ。そうしたら、その途中で塚(墓)を廻つて見たら、うちの父と、甥の父親

の棺桶ですね、引っぱり出されているんです。雨ざらしにされてですよ。それで戦前は水壘があったんですね、あれが割れたのを捜しましたので、遺骨を全部それに入れて、墓に納めました。あれから二十数年も経っています。そのままだけにありまして。

それからわたしのすぐ下の妹ですがね、頬にほんのニギビみたいなのができたんですが、それから黴菌が入ってですね、多分面疔ではなかったかと思いますが、顔がはれました。病院にやろうにも、お母さんのことがありますので、また行方不明になったんではないかと、近くにHという素人の医者がいまして、その人に診て貰っていましたが、とうとう癒らないで死にました。せつかく戦争では生き抜いて来ながら四名の子供を残して死んだわけです。わたくしが帰って来て、兄弟三人だけでも、これからいい人生を築き上げようと思ったのに、いっしょにいたのはほんの短い間でした。それでわたしは、五歳が下で十二歳が上の、妹の子供四人を引き取って、自分の子供と十一名の子供等を育てることになりました。現在は一人前になって嫁さんに行くのもいるし、また甥の方は、もう三年になりますかね、一昨年、家を作ってやりまして、分家させていますよ。

註、お父さんの遺骨を拾って来た割れた水壘に入れて墓に納めて、二十余年の歳月、そのままになっているという事は、遺骨に対する敬虔の念の厚い沖繩だけに、戦争の禍いが年月を忘れさせることを感じせしめる。人の心がのびのびと思うことが運ばれる平和の年月と異なり、孤児の甥や姪を引き取った大家族が戦後の荒廃の中で立ち上る時を忘れた生存の道は、二十余年という歳

ました。アメリカ軍の上陸の状態はわたしのいた立哨台から、肉眼でもよく見えました。

それでわたしたちは、上の屋を引き上げて、浦添村の安波茶（あはちや）へ移動して、そこに壕を掘っていました。わたくしは、そこでまた、戦友と同じ一小隊でいっしょになりました。この戦友は美里出身で、仲西（なかにし）小学校への入隊もいっしょで、教育を受けていた約一か月の間、枕を並べて寝ていた仲で、年も同じ十九歳でした。それで、いっしょに戦争もできるようになって、よかったですね、と語り合いました。

そういうことで、第一回戦闘は、大謝名（旧宜野湾村）に出かけました。戦闘は、五日か、一週間交代です。こうして交代して、第二回戦闘はですね、宜野湾の嘉敷（かかぢ）ですがね、向こうにむかっただけです。その第二戦闘ですが、この戦友がこう言ったわけです。

「まあ十四回目の戦闘に行ってきたから苦勞も難儀も分った。今度は誰が死ぬかわからない、死んだ場合は、生きていたのが、親たちと連絡を取るようにならね」と固くわたしの手を握りました。それでわたしも、うん、そういうね、と答えました。嘉敷の戦線には、八日ぐらいいた記憶です。第三回戦は、また元のところに帰って来て、少し下っていたが同じ安波茶だったんですが、その時に、戦友が戦死したんです、最初はわかりませんでしたね。

註、これから実戦の委しい話が長く語られ、足と後頭部に負傷したこと、他の壕内の友軍が火焰放射器で全滅したこと、そのほかいろいろの実戦談がたつたが県民の苦難、犠牲等の状況では

月も、あっとすぎ、父母肉親の死せる人びとへ思いをつねに持ちながらも、手の廻らないことが察知できる。

大城 永善（十九歳） 最後の現地徴兵

昭和二十年の二月、日は憶えていませんが、徴兵検査を受けて（繰り上げ徴兵検査、平時は満二十歳の十二月に徴兵検査が行なわれていたから二か年近くも繰り上げていることになる）第一補充兵ということになって、間もなく仲西小学校にあった隊に入隊したわけです。

それで一か月の教育を受けて、入隊は石部隊の十五大隊で、一中隊の一小隊にわしは入っていたのであります。その中に、沖繩地元からは八名いましたが、わたしのほかに一人は現在生存していません。

それから配置された現場が、那覇の上の屋（うゑや）の水源地のところに壕がありましたね、そこには三丈（約九メートル）ぐらいいの立哨台がありました。そこに勤務しておりました。

上陸したのが四月の一日ですね、その夜明けはうちが立哨しておりました。上陸ということは、非常にゆっくりして上っている。なぜかといいますと、その二、三日前から、水釜（北谷村）から謝朐（北谷村）にかけての線の前後の山や丘に、人間一人も生き残らないぐらいい艦砲を打ち込んでいたので、もう大丈夫と思っているからであつたでしょう、悠ゆうと上っておる。わたしは小隊長に報告しましたがね、それで小隊長は、望遠鏡を持って上って来てお

ないので割愛する。

後退しようとしても逃げる事ができないもんだから、壕に入ってから置いておくこと、中に入って休んでいる間にですね、もう疲れているもんだから、居眠りしたわけです。そうして目を覚ましたら、人の気配がないので吃驚して、手榴弾を抜いて警戒しながら蠟燭をつけて見たら誰もいないんです。

それからそこを出て後退しようとしたら、戦友が鼻から血を出して壕の上に転がっておったんですね。それで前に農道があつたんですが、わたしは戦友を担いで、農道を越えて、岩があつたわけですね、農道から七、八メートルぐらいい離れているが、その岩の陰に戦友を葬ったわけです。

そうして戦友を葬って農道に出ようとしたら、機関銃の一斉射撃を受けて、農道を横つ飛びに三歩ぐらいいで飛んで、度肝を抜かれたが辛じて死ぬのを脱がれた。それから自分の中隊をさがし、多分上の屋にいるだろうと思つて上の屋に帰ったが、誰も帰って来ていない。それで、郵便局の近くの屋良さんという家に行きました。その屋良さんは、さき上の屋にいた時、飯盒など洗いにいつも行っている家でした。それで誰も頼る人がいないので、その屋良さんに行つたわけです。熱もうんと上つていたもんですから。そこに三日間いたがですね、そうして手当もして貰つたんで、ようやく熱は下つたわけですよ。

そうして沢峠の指揮班に行つて見たですよ。そうしたら中隊はそこにいたわけ。帰って行つても何も訊かないですよ。それで逃げて、野戦病院に行つたんです。そうしたら受けつけて、四日ぐらいい

いたですよ。そうすると重傷患者がどんどん入って来るんです。手のない人、足が切れた人、体に重傷を受けて担がれて来る人、そういう人たちに自分の席を譲って、というより出されたのです。

それで、また上の屋に戻って、屋良さんに行って、十三、四日世話になっていましたが、隊の壕にカンパンの箱を三つ置いてあったことを思い出して、持って来て皆で食べてお礼にしようと思ったんです。それで壕に入行って行ったら、そこに城間部落の人、一家族がいたんです。それでカンパンのことを話したら、自分たちが食べたから、持っている食糧のある間はいっしょに食べますから、というんです。そうして、そこに三、四日お世話になって、わたくしも城間（浦添村）に又吉という知った人がいましたので、お互に知った人の噂なども話し合いました。

そうしていると敵の小銃の弾が時どき来るんです。それで出て見たら、敵はもうそこへ来ています。これは大変だと思って、夕方だからはっきりわからんが、多分上の屋から真玉橋の上の方向へ向かって逃げたが、墓場の沢山あるところ、多分識名あたりと推察される）を通して、そこからは真玉橋は近いところです。その墓場で一晩泊ったんです。城間部落の家族といっしょです。そこも弾が来るので、歩いたところはわからないんですが、今度は高安（豊見城村）へ移動しました。高安へ行ってますね、ようやくこちから（足）破片が見えたわけです。それで城間の連れの方がですね、剃刀で切って開けてですね、爪で引き抜いて取りのけました。

それからわたしは、「こんなに歩いてはいけません、どうしても自分の中隊をさがさねばならないから行こうね」といって、城間の

のうしろや壕に飛び込んで隠れたんです。それでですね、その又吉の小のヒロシというのがこちをやられ、戸棚に入っていた親が腹をやられたんですが、父親の方は、虫の息で生きる見込みはないから水も上げなさいといっって、ほとんど即死でした。

それから同じ部落のセイ次郎というのが足を切られたですよ。これはほとんど片足が切れてですね、切れた先きはぶらんぶらんしているんですよ。それがですね、家の中から門まで切れた足を引きずって歩いたんですよ。それでこれを見た親がですね、すぐ逃げようとするんですよ。その家族は別で、いっしょに三軒ぐらいい入っていったんですよ。この母親は、元県庁に勤めていた人のお婆さんであつたとわたしはきましたですがね、この方は、海岸はたに逃げようとしたんですが、この子があまり、お母さんよう、と叫ぶもんだから、ぼろで包んでやっていますよ。その後はわたしは見ませんでした。

敵が真壁（字）に来た時ですね、うちの中隊長はいないもんだから、中尉が指揮を取ったですよ。それで、真壁の線に敵が入ったら、戦闘は出来ないから、歩けるものは全部出て下さい、ということとで、わたしの足はまだ繃帯がとれないで巻いていましたね、ようやく戦闘準備に集合したんです。ところがちょうどその時、また左足の甲を艦砲の破片でやられましたね、そこをやられたら、歩けないんですよ。それで、お前たちは、残って置きなさい、といっって、疵負ったのはそこに置かれていたわけですよ。

兵長がですね、どこでどうして怪我を受けたのか疵は見えなかつたが全身疵で動けないくらいでした。それで手榴弾を一個ずつわた

家族と別れて出かけて、あちこちで訊いたら、首里の戦争も終ってしまっているわけ。石部隊は、休むために島尻に下っているということと高安で聞いたんです。それで、糸満へ向かって一目散に走って行って、潮平・兼城の兼城（旧兼城村）で一晩明かしたんです、自分一人ですね。

翌日、隣りの人家に、お母さんらしい人とお産前に見える三十ぐらいになっていたでしようかね、女が二人でいるんです。そうしたらそのお腹の大きかった女は、その晩、お産しておりました。

その女の人たちは、そこにいるといっっていました、わたしはあちこち歩き廻って、喜屋武の前の山のある部落、何という部落ですか、高安で別れた方とまたあったんですよ。あの部落に行ったらですね、高安で別れた方とまたあったんですよ。

なぜあったかといえ、その部落にうちの中隊がいると聞いて、それでそこで訊ねたら、部落と海岸の間に壕を掘っているということがわかったんですよ。早速訪ねて行って、御苦勞さんと挨拶をして入ったんですが、いる兵隊たちはちっともわからないんですよ。球部隊からの配属兵ばかりで、田野兵長ひとりだけが負傷して寝ているんですよ。中隊長も見えなかつたですね、そこに他の隊から来た中尉もいましたがね、それでしばらくはそこで暮らしていたが、芋掘りに行ったんですよ。そうしたら、艦砲があんまり激しいもんだから、人家へ逃げ込んだわけですよ。逃げ込んだらですね、いっしょになったわけですよ、高安でいっしょだった方たちと。その人たちは、そこに宿していたんです。畑の中に二軒あったんですよ。そうしたら、艦砲が激しくて危いから、みんなおのおの、戸棚や

されて、「敵に見つかった時はこれでやれ、われわれも帰って来ないからそのつもりでおれ」、といっって出かけましたが、もう人員は三十五、六名といっったものではなかつたかと思えます。

そうしたら、二、三日待っても帰って来ない、四、五日経っても帰って来ない。それでもうあの連中は帰って来ないんだと思つて、今までの兵隊という緊張した気持ちは、否気な、許されたような気持になりました。

それでうちがどうして生き残ったかという点について、そのいきさつはですね。

上里という部落は、海岸まで千メートルくらいではないかと思えます。海岸端はですね、深いところが八十メートルくらい、浅いところが三十メートルくらい、ヤラブの木（テリハボク）が阿檀を巻いているんですよ。

わたしたちの壕はですね、海岸と部落の中間の畑の中に造ってあったわけですよ。その畑の境界は、小石を積み並べたり、岩があったりしているでしよう、それを利用して掘ってあったんですね。西の海へ口を向けて、階段をつけて、約八米、突き当ってT字型、片一方の長さが六メートルくらいでした。

その壕に残っていたのは、田野兵長と玉本衛生兵とうちと三人だけでしたが、わたしは、部落廻りをしました。それは、もしや父母がここへ来ているのではないかと思つて廻つたのです。わたしは一人息子で父母と三人だけの家族だから、父母のことを大変心配しつづけて来ました。それで父母が来ていなくても、自分の部落や隣り部落の人たちがここへ下って来ていれば、父母のたよりがわかると

思ったんですね。そうしたら部落の隣近所の人がいいたんですが、その人たちに訊ねて見ても全然わからないんですよ。うちの考えでは、島尻に来ておもうっていたんですよ。

ちようどうちが歩き廻っていると、熱田の方で、年をとった夫婦、去年八十八歳の米寿をされましたがね、その方たち、お爺さんとお婆さんが見つかったんですよ。人の屋敷の隅にですね、小石を積み上げて囲いをして、上は枯れたキビですね、茅などで被うておったんですよ。よくこんなところで会うことができたという気持ちで、手を取り合って喜びました。三晩だったと思います、ここに泊りました。

そこでは盗み食いをしたんですね。畑からもぎ取って来た黍、ほんとなら白で搗いて穀を取らねば食べられませんが、手で揉んでつくっただけの黍粥をお婆さんが煮るんですね。お婆さんとお爺さんは、お釜に煮ながら水汲みに出て行きました。ことごと沸ぎっていたので、わたしは茶碗を持って来てついで食べたですよ。お婆さんが帰って来ると、わけ合って食べるのですが、世話になつていながら沢山食べようという慾が出たわけですよ。

こうしてお爺さんお婆さんと、暮していると、また小銃弾が来たんですよ。小銃弾が来た敵は近くに來ているんですからね。これは危いといつて、うちはお爺さんとお婆さんをうちの壕へ引っ張って行きました。

そうしたら一晩たつと、ほんとは一晩まだ経ってはいません。夕方に連れて行って朝の三時四時頃でしたから。それで田野兵長がですね、あの方たちは誰が連れて来たかというんです。わたしはさらさら物も言わないで、二回目は目をキョロキョロさせている。三回目やっただんです。そうしたら三回目には完全に死んでしまいました。熱田のお爺さんとお婆さんも見ています。今考えたら、何とか助ける方法がなかったかと思いますが、わたしは、二年後にしか今日皆がしている成年式をむかえないという年齢でありましたし、あの時は、兵長の命令は、まだ絶対的のものになっていましたから、こんな五、六歳になっている子供を殺すのは、酷いとは思いましたがですね。仕方がなかったですよ。

この子の父親ですが、艦砲や弾は、酷かったんで、弾に当たって死んだのか、それとも逃げたんですか、それは後になつてもわかりませんでした。

玉本衛生兵は、子供を殺すと、わたしに子供を捨てて来いというんですね。それはわたしは出来ない、あなたがやっただから、あなたやりなさい、とわたしは言い返しました。わたしも同じ一等兵だから、言い返したっていいんです。それで玉本衛生兵は、自分で殺した子供を自分で片づけたわけですよ。

そうしたら兵長がうちを呼ぶんですね。兵長は寝ているんですが、うちが行くと、顔を持って来いといつて自分に近づけさせて、びしゃと横面をやりました。手は動きおつたんですよ。

この壕には、うちがお爺さんたちといっしょにいた間に、若い女が三人来て入っていました。糸満の人たちでしたが、友達がいっしょになつていたようですね。それで五つか六つになつていたと思われた男の子が絞め殺されたので、われわれ七人いた沖繩県人は、六人になりました。

ばくれて、わからん自分たちで入って来ているんだ、と答えました。田野兵長は、こんなに咳をしては、敵に発見される、壕から出しなさい、というんですね。爺さんが、老年で絶えず咳をしていたので、それを嫌ったんです。うちは隣部落の方で、よく知つていて親しい方なんです。

そうしていると五、六歳の子供を背負った男の人が入って来ました。他の家族は艦砲で全滅した、二人だけ生き残った、というんですね。わたしは村はどこですか、と訊いて見たんです。すると中城村だという。自分と同じ村ときいて嬉しく思いました。中城はどこですかと訊いたら南上原だという。それをきくとわたしは、それでは父母のことは分らないだろうと失望しました。それでも同じ村の人だし、そのまま居て貰うことにした。

すると、子供の父親は、来て半時間ばかり経つと、壕をさがしに行くから、この長男を見て頂戴ね、といつて出て行ったが、夜中になつても来ない、夕方に出て行った人がですね。それで子供は、泣くわけですよ。お父さんよう、お父さんよう、と呼び叫びながら泣くんですね。それで、田野兵長から命令が下つたのです。この子供を殺しなさいといつて。命令を受けたのはわたしです。うちはですね、聞かん振りをしたんです。わたしが聞かん振りをするもんだから、今度は玉本衛生兵に、これを押しつけたんです。この衛生兵は一等兵で、他府県出身者で、沖繩県人ではありませんでした。命令を受けたので、この玉本衛生兵が、階段へ斜に寝かして、そのままやっただんです。やったら一回目は、呼吸も止つて、死んでいると思つたのに、起きて泣いたんです。またも絞めたですよ首を。絞め

そうして子供が殺されたので、今度はお爺さんとお婆さんの問題に移つたんです。兵長は出しなさいというんです。それでわたしははいと答えて、お爺さんお婆さんへ、あべこべに方言で、お爺さんお婆さん、兵隊がどんなに出なさいといつても、出ないようになさいよ、と言つたんです。するとお婆さんは、そうだよお前、こない壕だのに出るもんかというんですね。それで兵長は、お婆さんはなんと言っているかと訊くから、どうしても出ないといつていますといつたら、兵長は、もう少し頭を使いなさいといつて、どういふ具合に使いますかね、といつたら、この壕はね、兵隊が爆弾をもって、全部自爆するから、出て下さいといつたらすぐ出るよというんですね。わたしはまた、お婆さんたちに、どうしても出ませんようにと、方言で伝えたんです。

それで今度はうちが出来ないから、衛生兵が来て言つたんです。それを糸満の女たちが通訳したんですね。そうしたらお婆さんたちは驚いてすぐ出ようとするんですね。それでわたしは、あまり遠くへ行かれないように、この入口近くにいらつしやいといつたんですね。終戦なって後で聞いたんですが、お爺さんとお婆さんは、海岸を歩いている時に、捕虜になつたそうです。

それから上里という部落は、井戸が一つしかないですよ。つい先き頃、子供を連れてですね、水を飲んで命を助かったその井戸に行つて写真も撮つて来たんですがね、二十五年ぶりに。昔の通り、ほとんどちがってはいませんでした。

それでこの井戸ですつと水を飲んでいたので、アメリカ軍が海からマイクで絶えず呼びかけているので、水がとれなくなつたん

ですよ。

戦争は兵隊と兵隊の戦いで、人民の戦いではないから、海岸に隠れている住民は、男は褌一本になって、女はそのままでいいから出るようにしなさい。

そういつて、マイクで、日本語で呼ぶんですよ。そうして海岸には、ぎょろり住民が詰まっているんです。二、三日前に喜屋武の部落にいた人たちも、みんなそこへ追い詰められて来ていたんですよ。阿檀の中にいる避難民は、みんな慣れていたのでしよう。出たら後から友軍にやられるし、出ないとアメリカ軍は焼き払うというのですからね。アメリカ軍がいくら呼びかけても出ないもんだから、とうとう火焰砲で焼き払われたわけです。海岸端の阿檀林が全部焼き払われたので、何千人、あるいは方を救える避難民が焼け死にしました。

アメリカ軍は、こうして沢山の人を焼き殺すと、あちこちの小さい壕にいた人たちをさがして捕虜にするんです。

なせうちが助かったかというのと、畑の中で部落と海岸との中間で、そこに壕があると気づかなかったんです。あちこちさがし廻っているが、壕の発見がなかなかできなかったんですよ。ところが、あちこち捕虜して、自由に歩き廻っていて、とうとう見つけれられたですよ。

そうしたら戦車砲が飛んで来たんです。それはお爺さんお婆さんが壕から出て、七、八日経ってからでした。

壕はつぶれました。それは朝でしたが、玉本衛生兵は、壕がつぶれた時にやられてしまいました。田野兵長は無事でした。T字型のが見つかつたら、わたしがおることを言わないように置いて置いたんです。

やがて夜もすっかり明けると、アメリカ兵は、海岸から歩く、畑も歩き廻っている。それで女たちは、どうしても隠れていることはできないと思ったのです。手を上げて出て行つたわけです。三名が。

わたくしは、隠れていて、アメリカ兵が手振りでも、といるかといっているのが分るんです。女たちは、手振りでも、いないといっていました。だがしかし、こんな時に、必ず連れがどこかに一人や二人いることを知っているんです。ひょっとしたら見ていたかも知りません。それでアメリカ兵は自分のところへやって来るんです。わたしは最期の自決という考えだったんでしょうか、手榴弾を取り出そうとさわって見ました。すると体のどこにもない、ここへ来るまでに落してしまつてなくなつたとわかりました。それでわたしは、どうにでもなれといった気持ちだったでしょうね、仰向けに寝てしまいました。そうしたらアメリカ兵は、うちのところへ来て、へい、へいいうんですよ。うちは死んだ恰好で目もあけないですよ。そうして、狸寝入りみたようにしていると、カムオン、カムオンといつて、畑に引つ張つて行かれました。

そうしたらこの引張つて行つた兵隊が、わたしの負傷を治療して繃帯もしてくれましたので有難いと思つていると、もう一人が包帯を出すんですね、わたしはそれで刺し殺すのかと思つたんですよ。しかしそれは、繃帯の結んだ端が長く出ているので、それをきれいにして切つてくれたんです。それでわたしは、おや、親切なんだな、と

ところにいたので助かつたんですが、玉本衛生兵はいつもは田野兵長のところにいるんですが、その時は入口の壕にいて、戦車砲を打ち込まれて死にました。糸満の女たちとわたしは兵長と反対のT字型の一方にいたので、何でもなかつたんですよ。

糸満の女三人とわたしは、この兵長をここに置いて、逃げようではないかと、方言で話し合いました。海岸端を行つて、港川(具志頭村)に行つて、与那原(山原)を通つて、山原(国頭地方の総称)に行こうではないかと相談しました。田野兵長は、わたしたちが方言でこそ話しているのを察して、自分もお前たちといつしよにしてくれと願つていましたが、うまく誤聞化しました。

その夜の午前三時、あるいは四時頃になっていたかも知りません。わたくしたち四人は、田野兵長にわからないように壕を出かけたんですよ。そうして海岸端に向かつて歩きましたが、そうしたら、歩いていくうちに、東の空が明るくなったので危いと思つて、これから壕に引き返すのも時間がかかつて、もう夜が明けるから、今日昼中は海岸端で、一応過してから、また晩に立とうと思つてですね、海岸端に寄つて行つたんですよ。

そうしたら、海岸の阿檀林は、二、三日前の火焰砲、火焰放射器、黄燐弾などでひどく焼き払われて、人間も大へんな酷たらしい焼け死にです。いくら片づけてあるらしかつたが、あちこちに黒こげになった片づけられてない人間が見られたですよ。うちは兵隊で軍服をつけているので、それをランニングだけにして、女たちは焼け払った入口に休んで、わたしは、焼け払った山の中の奥に入っていることにしました。それでわたしは女たちに、もしあなたたち

思つたんですよ。すると、他の一人が鉄砲をわたしの頭に向けたんですよ。それでわたしは撃つ考えだと思つて、うつむいてもう奥歯を食いしばつて、半ば観念していたんですよ。そうしてまた破片を見せて、これが、これかと二つのどれかと訊くわけです。それでわたしは、破片ですよといつたら、ああ、そうか、立ちなさいといふんですよ、手を取つたりして歩かれました。

そうして上里部落の製糖工場がね、むこうに広場があつたですよ。そこで今度は、沖細人の通訳と兵隊とおつて、わたしは十五分くらい訊問されたかな、兵隊ではないといつてですね、瘦せてもいたから、そうしたらお前はあちへ行けといつて、民間人の方へやられました。

兵隊は、褌もかけさせないまま裸でした。それでわたしは、兵隊は、並べて殺すのかなと思つたですよ。裸のまま連れて行くんですよ。そこにいた裸の兵隊はトラックで連れて行かれて、民間人も、糸満の三人の女と四人しか残っていませんでしたが、アメリカの兵隊は、四、五人いました。

そうしていると、兵隊たちは、糸満の三人の女を連れて行きました。その時は上里の部落はほとんど空屋でしたから、兵隊たちが空屋に三人の女をつれて行つたんですよ。その時はそれは、分りませんでしたが、女たちを辱かしたんですよ。今になって、それに間違ひなかつたことが、あの時の状態でわかりますよ。あれは、いたずらしたんですよ、帰つて来た時の顔色といつたことはわかりませんが、タオルを濡らしてしぼつて、それで頭の髪を拭つてやつたり、レモン水をつくつてやつたりしてましたよ。いたずらしたの

で、悪いと思っただけだったんでしょ。

わたしが命を助かったのは、壕が畑の中にあつたからで、そうではなくて海岸端に行っていたら、恐らく皆と同じく焼け死んでいただいでしょうね。

そうしてわたしは伊良波(豊見城村)に連れて行かれて、それから野嵩(旧宜野湾村)に移されて、それから親をさがして、歩いているのだが、栄養失調で自分の命はあと何日だと自分ではっきり分る気がしました。

自分の親は、泡瀬へ行つて、それから塩屋(美里村)に行つていたんですが、父も母も無事でおりました。

註1、同席の比嘉永俊さん発言。「君が安慶田の病院に送られて来たのは、六月二十三日だよ。わたしは二十一日から二十三日まで、病院つきの死体埋葬人夫をしていたので、六月二十三日に間違いない。そこへ君のお父さん、お母さんが訪ねて見えたね」といつた当時のことを指摘された。

註2、談者の大城さんは、全然自分を知らない戦友の姉が夢によつて、はっきり住所姓名を死んだ戦友から告げられ、埋葬場所を大城さんから聞くようにと知らされてきたが、そうでしょうかと訊かれて、人生には不思議なことがある、という神秘的なことを語り、農道から八メートルほど入った岩の陰に埋めた戦友の遺骨取りに行つたが、そこは米軍が敷きならして遺骨はなかつたので、その場所の石を拾つて、戦友の遺骨、その霊として持ち帰つたという談話も委しく語つた。

よにしていることになりました。あの時の区長さんは、こつち(永俊さん)の奥さんのお父さんです。そうしてわたしは兄弟二人は、髪もぼうぼう生やしてですね、島袋あたりでは、早くに捕虜になつているし、ここいらでもほとんど島袋と同じく早いうちに捕虜になつていましたが、わたしたちはずっと遅くまで隠れてですね、一番最後に捕虜になりました。

そうして最初は、泡瀬(美里村)に行つたらですね、わたしの養父母がいました。わたしの養子先きの父母は、長くハワイにいてのハワイ帰りで、英語ができるもんだから、アメリカと話して、お肉なんか時には貰つて来るんですね。そうしたら、みんなから、スパイと言われたんです。

泡瀬では、みんな普通の家に、めいめい部屋を与えられていたんですがね、わたしの養子先きの父母の場合は、マース屋(マースは塩すなわち塩をつくる小屋、ここでは屋号か)といつて、大きなお家があつたんですね、その座敷の片隅にいたですね。その座敷には、青年たちもいたですよ。わたしたちが行つても、養父母は、ただあつて見るだけで、家の中に入ることもしませんでした。その養父母はまもなく、泡瀬から大里(宇)に移されたんですね。大里は泡瀬と同じ美里村ですが、わたしたちの部落の前を通る本道に沿つている人家の多い部落です。

それでわたしの養父母は大里にいるし、島袋に母たちがいるし、父はまたこつち(永俊さん)が捕虜になつて安慶田の前には、家族が五かしよに分散しておつたんですがね、これがいっしょになつたのが六月ですね、福山というところで。

比嘉善俊(十七歳) 現区長

わたしの兄弟は、七男二女ですが、わたしは、養子になりました。それで養父母の壕(お藪)と、実家の壕とは並んでいます。それで両方の家族たちはみんな一かしよに入つて、ひとつの壕には食べ物を入れて置きました。

最初ですね、こつちの方(同席の比嘉永俊さんを顔で示す)が、わたしたちは島尻へ突破するから、あなた方も行くんだつたらつて来いといわれたんですね。

そうしたらわたしの養父母は、わたしたちが出て行こうとしたら、あなたたちは間違つている、戦(いくさ)というものは、食べものがないと、ここにじつとしていたら、誰もなにもしない、といつていました。

それでもわたしたちは、壕を出て、島尻へ逃げ出すことにしました。こつち(比嘉永俊さん)は足が早いし、わたしたちは大勢で、小さいものが多いでしょう。それに母は妊娠していたし、足が遅いんです。それでも一応はみんな大城(大里村)の部落までは行つたんですが、向こうから弾を撃たれてですね、引つ返したんです。引つ返す途中で、家族がちりぢりになつて、四女に道子といつていますがね、それが父といつしよ、三男と一番末っ子の五女とが母といつしよ、長男の兄さんとわたしはいつしよでいたがね、自分たちの壕に戻つて行つて見たら、壕に残して置いたわたしの養父母は、はやくも捕虜にされて、そこにいなかったんですね。

それでわたしは兄さんと二人で、戦前の区長さんの家族といつし

福山では食糧困難ですね、野原や山の藪とか、海のほんだわら、また田圃に生えているシラグチ(ママ)といつてですね、あれなんかを取つて来て食べたりして、栄養不良になつて、足が腫れたりなんかしておつたんですね。わしらのうちの場合は、男が三名おつたもんだから、夜の夜中に起きてですよ、脱糞して、中頭あたりまで行つてですね、罐詰やらそのほかいろいろの食物、アメリカの食物をさがして来て、大して食糧に困りませんでした。それは六月二十日以後、七月初め頃からだと思ひます。

うちは、家族が十一名、それにわたしの養子先きの父母、みんな十三名が、この戦争を無事に生きることができました。

註1、「栄養不良になつて、足が腫れたりなんかしておつた」といふ言ひ方は、今日この記録で見ると、言いまわしが、ちよつとおかしく、ユーモラスさえ浮べそりな気持ちになるが、立ち入つて当時を考えると、多くの人が栄養失調に陥つていた悲惨な状態を、よく表現している。足が腫れるのは、ほとんどの人がそうであつたとのことで、顔まで腫れている人も多かつたといふことをしばしば耳にした。

註2、比嘉永俊さんと西原村翁長部落でいっしよであつた小橋川ヨシモリ医師の一家三人は、最初に主人が砲火でやられ、鹿兒島出身の夫人と息子は喜屋武岬まで落ちのびて、夫人は壕にこもつていたが、火焰放射器か黄燐弾で焼死した。息子は全身火傷で、コザの病院まで全身縋帯して来たが、助からず一家全滅したと話された。

註3、熱田部落の東り松根小(屋号)の金齒おじさんは喜屋武まで釘だけを持って来ていたと大城永善さんが話した。ずつと後で訊いたら家を作るためだつたと言つた由。